

前略 コレクティブ様 お元気ですか。以前、「奈良と発泡酒の因果」について、ぼやかして頂いた小生。今もマウスの横に酒を灯火とし、コックピットにインしているため、文章が散らかることを、どうかお許しください。

今回はレコード屋の行商として参加させて頂くので酒の話は控えて、音楽のことを。最近店で特集しているOMAR-Sについて書かせて頂きます。平田満風に書けば、「もしもお許し願えれば、OMAR-Sについて話しましょう」

舞台はジャズを師と、ファンクをブリーチャーと仰ぐモーター・シティ。その路上から成層圏を突き抜けた先に、見えた光は、路地裏にある土俵を照らす街灯と等価でした。と言わんばかりのファンクネスとミニマルズムを備えたサウンドは所謂デトロイトハウスの中でも野生剥き出しの音像。60's、70's ソウルミュージックを猥雑にデフォルメしたモダンファンク。はたまた、BASSIC CHANNELがレゲエ/ダブに仕掛けた手法のように、80's ディスコ/ハウス、90's ハウスの肉を削ぎ落とし、骨が鳴るようなトラックに仕上げたテクノ/ハウスはモータウン・ミニマルと呼ばれ、彼のレーベルFXHE (SEXYの意) 初期カタログは、イーヴン・キックを愛するパーティー猛者に親しまれていました。勝手に始めといてなんなのですが、字数が足りなさそうなので、後は店で呑みながら。。

ということで、遂、先日FXHEからリリースされたOMAR-S新作の紹介でござらせてもらいます。南三角座をテーマにした粋な盤です。
OMAR-S Triangulum Australe (Say It in Space)

FXHEキャンプからLUKE HESSがリミキサーとして参加しています。珍しく、まなざしは宇宙へ。南三角座をテーマにしています。JEFF MILLS系譜のミュータント・ミニマルをFXHEグルーブに落とし込んだような、ピュアな響きのデトロイト・テクノです。サイドBにはOMAR-Sのスイートなシンセリアフレイン、露骨なドラムがグルーブを刻む「MAYALL II」。こちらはザ・FXHEグルーブともいえる、粗ごなしなファンクネスを感じることができます。

この盤、ラストに収録されているアウトロも厳ついんです。電話の会話をレコーディングしているんですが、会話越しにFIX (P-FUNK ALL STARSのシンセベースを使用したデトロイト・テクノ) がステレオから聴こえてきます。Galaxy 2 Galaxy 「Metamorphosis」を路上の感覚に落とし込んだら、こんな音が出そうですね。2012年 FXHE の盤はコレでした。

今週中にはFXHE DETROITから荷物が届くので、今回の行商で並べることができればと思っています。間に合えば、嬉しいのですが。あっ、因みに、フォード勤めの二児の父 OMAR-S。カーチェイス用の愛車はスバルだそうです。他にも色んな盤を持っていくので、掘ってみてください。民謡からテクノまで、コレクティブ価格で仕込んでいきます。それでは、よろしくお祈りします。

MOLE MUSIC <http://mole-music.com/>
大阪市中央区千日前2丁目3-9 A8 ユニバースビル1F

SP盤とはStandard Playingの略。LPがLong Playingなので、それ以前に存在したレコードの規格を指します。回転数は78rpm、材質はヴィニールではなくシェラックという材質で硬く割れやすい。大体10インチサイズで片面1曲収録されています。古いものなので雰囲気はあっても音は悪いだろうと考えがちですが、あとで述べるように必ずしもそうとは限りません。まずはSP盤を楽しめるお店を紹介しましょう。

御堂筋線昭和町駅下車徒歩5分、ガロート珈琲という小さな喫茶店があります。ガラード301というターンテーブルの名器がカウンターの隅に置かれ、真空管アンプ〜モノラルスピーカーで強靱なSP盤の響きを聴くことが出来る、と言うとちょっとマニアックな感じですが、入りにくい雰囲気はゼロという理想的なお店。ジャズ、ブルースからラテン、ブラジル、和モノetc.と幅広いジャンルをSP盤で楽しむことが出来ます。普段はCDがかかっていますが、カウンターの奥に並んだレコードを眺めていると、気さくなマスターがおもむろにSP盤をかけてくれるという寸法です。ここで聴くSP盤の音はとても素晴らしい、それだけで一つの音楽体験になるでしょう。もちろんマスター手作りのケーキとコーヒーもとても美味しい。少し足を伸ばせばこれだけの充実した体験が出来る。大阪っていい街です。

家で気軽にSP盤を疑似体験できるようなCDも最近多く出ています。中でも戦前ブルース音源研究所が編集したLonnie Johnson “True Revolution” というCDは出色の出来。これはSP盤からの起しではなく、金属製のマスター盤を使用とのことで、ガロート珈琲で聴ける音に近いとても力強い音を聴くことができます。またDust-to-Digitalから出ている“Victrola Favorites” というコンピには当時の雰囲気を偲わせるレコードの図版がたくさん記載されていてオススメです。最近でもKitty Daisy & Lewisというグループが78回転のレコードを新譜としてリリースしてたりします。彼らはヴィンテージな機材を使って40~50年代へのオマージュに溢れた音楽を作っている兄弟バンドで、そのこだわりには思わず拍手を送りたくります。もちろんCDで聴いても彼らのこだわりがしっかりと伝わってきますよ。

以上駆け足ですがSP盤について書かせていただきました。つまるところSP盤の魅力とは、録音風景が容易に想像できる距離の近い音なんだと思います。機会があればぜひガロート珈琲を訪れて、SP盤の魅力に触れてみてください。

ガロート珈琲ブログ <http://garoto.blog.so-net.ne.jp/>

information

今回のcollectiveはレギュラーメンバーの楠田行展とmackiartが不在。その穴を埋めるべく、collectiveと親交の深い、藤田浩正と佐藤洋輔をフィーチャー。2人ともティーンエイジの時点ですでに、オールジャンルディガーとして圧倒的な存在感を放っていた異彩。本日は彼らの「曙並みの懐の深さ」を堪能してください。

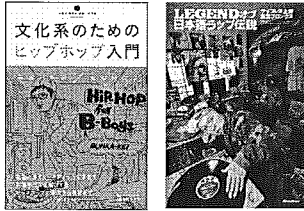
次回コレクティブは約3ヶ月後を予定しています。
詳細はブログでご確認下さい。
<http://blog-collective.blogspot.jp/>

ヒップホップの巻

久しぶりの『press collective』登板ですが、毎度バカバカしい話におつきあいを願います。

さて今回は最近読んだ本の話題でも——。このごろたまたまヒップホップに関する本を2つばかり読みました。

①長谷川町蔵・大和田俊之
『文化系のためのヒップホップ入門』
(アルテスパブリッシング、2011年)



②サイプレス上野・東京ブロックス
『LEGEND オブ 日本語ラップ伝説』
(リットーミュージック、2011年)

同じ2011年刊行の対談形式の本とはいえ、①はアメリカ、②は日本のヒップホップをテーマとしています。ちなみに、①②ともオビの推薦文が宇多丸(ライムスター)という共通点を持ちます。

ヒップホップはツマミ食い程度の聴き方しかしていない身で、これまでも、ネルソン・ジョージ『ヒップホップ・アメリカ』(ロッキングオン、2003年)や後藤明夫編『ラップ以前』(TOKYO FM出版、1997年)などは読んできたものの、もはやその内容も忘却の彼方。そこでひとつ歴史のおさらいと①を手にとったところ、これがたいへんよくできた本で、ヒップホップ黎明期から近年の展開までをじつにわかりやすく解きほぐしてくれました。

①は「興味はあるのに聴き方が分からない、どこから手を出せばいいのか分からない」人に向けたレクチャーを標榜し、「ヒップホップは音楽ではない、ゲームである」との見立てのもと、その歴史を解説していきます。いわく、ヒップホップとはあくまでも「一定のルールのもとで参加者たちが優劣を競い合うゲームであり、コンペティション」とのこと。

この見立ては②を読むすすめるうえで助けになります。②で「ゲームにエンタリーしないやつには発言権もないっていうのがヒップホップのルールでしょ」(p.214)という発言があるように、①の見立ては日本にも当てはまるわけですね。

②は一応年代順にアルバムを取り上げているのですが、音楽の話は下手をすると半分あるいはそれ以下で、人間関係やらライブの様子やらといった周辺情報がやたらと盛りだくさんに語られるケースが多々あります。つまり、この②は音楽の本というよりもむしろ「ゲーム参加者による日本語ヒップホップコミュニティの解説書」なのだと考えればよいのです。

翻って、自分はゲーム参加者ではないがゆえ、ヒップホップは「興味はあるのに聴き方が分からない、どこから手を出せばいいのか分からない」分野だったのかと合点がきました。なお、これらを読み進める際には、いちいちYoutubeなどチェックしながら読んでいくというそう具体的に面白く読めることと思います。では、秋の夜長には読書の時間を楽しんでください。

<Artist> Roberta Flack
<Title> Feel Like Makin' Love
<YouTube> <http://www.youtube.com/watch?v=rzo35edO74A>

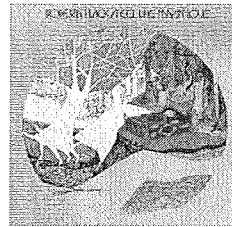
今回は70年代ポップスから。Eugene McDaniels作曲の、1974年にビルボードHOT100で1位を獲得した大ヒット曲。数多くのミュージシャンにカバーされる名曲です。

本題に入る前にまずは基本知識を。古典的なジャズ、ポップスのコード進行は、曲のキー(調)に対して「2度-5度-1度」およびその変化系として「2度-♭2度-1度」という進行をすることで「結句」します(正確にはIIm7-V7-IΔ7形式となります)。この進行が文章で言えば一文に相当するようなまとまりで、「ケーデンス」といいます。特に後ろ2つのコード進行(5-1と♭2-1)によってセンテンスの終止感(聴く側の気持ちよさ)が得られます。70年代までのポップスではこの基本に忠実な曲が多く見られます(80年代以降はより装飾が高度になったりルールが変わりつつあったりします)。

以下がAメロのコード進行です。

<Key : E ♭ >

Fm7
Strollin' in the park
B ♭ 7
And watching' winter turn to
E ♭ Δ7 D ♭ 7#11 C7#9
spring



キーE♭のルート(1度)のコード「E♭Δ7」が3つめに出てきます。そこへ至る2つのコードを見ると、「Fm7-B♭7」となっており、E♭に対する2度と5度のコードです。きれいに2-5-1形式で最初のフレーズを構成しています。

ここで1センテンスが結句し、次に繰り返しの先頭に戻る為のつなぎのコード進行が続きます。ここがこの曲ではカッコいいポイントです。(コードに付いた「#O」となっているのはテンションといってラーメンで言うトッピングのようなものなので今回は無視しておく、)進行は「D♭7-C7-Fm7...」となって繰り返しの先頭に戻ります。ここで2番目のコード「C7」を1度に見立てると、その前の「D♭7」は半音上=♭2度になり、「♭2度-1度」形式になります。そして繰り返しの先頭の「Fm7」を1度に見立てると、その前の「C7」は5度になり、「5度-1度」形式となり、結句を連結しながら先頭に戻っています。結句する部分にリスナーはかっこよさ、気持ちよさを感じるので、このつなぎ部分がこの曲では特に「おいしい部分」といえます。

ちなみに繰り返し2回目の最後、サビにつながる部分の進行は「B♭m7-E♭7-A7#11」となってサビ先頭は「A♭Δ7」です。ここはサビ先頭を1度と見立てると、進行は「2-5-♭2-1」となり、ケーデンスのパターンを組み合わせた形式となっていてかっこいいつながりになっています。

全体的に上記のような非常にスタンダードなデザインとなっており、これが多くの人に長く愛される名曲の由縁なのかもしれません。

レコード愛好家は単に「良いレコードを見つける」ということだけでなく、同時にそこに物語性を込めたがる習性を持つ生きものといっても過言ではないでしょう。見知らぬアーティストの作品をジャケ買いしたり、店でかかっている音源に触発されたり、旅先でふいに立ち寄った店で一生ものの盤に出会ったりと、レコードの数だけ「物語」があるわけです。この物語の魅力に取り憑かれて、レコードを掘ること自体が自己目的化しているレコード愛好家も少なくないように思います。

今回のゲストDJである藤田浩正氏と僕もご多分に漏れず、レコ屋巡りの愛好家。彼と僕は大学の同級生で、かれこれ10年来のお付き合いですが、今日に至るまでレコ掘り以外の遊びをしたことがほとんどありません。正月に久しぶりに再開しても、レコ屋巡り…。そんな彼と本年9月に気合の入った「レコ屋巡礼」に行ってきました。行き先は滋賀県高島市のアオイレコード。高島市は琵琶湖の北西部に位置する豪雪地帯で、福井県の小浜市にも隣接しています。この高島市に、古民家をまるまるレコ屋にしたお店があるとの情報をcollectiveのゲストDJとして参加して下さったgeronimo氏から聞きつけ、ずっと気になっていたお店です。

大阪から車を2時間走らせアオイレコードに到着。噂に違わぬ古民家レコ屋。まずはそのロケーションとボリューム感に圧倒されました。そして玄關をガラガラと開けると、老夫婦が佇んでいらっしやいまして…。はい、この店のオーナーさんですね。一日に誰も客が来ないことがあるらしく、実のんびりとレコード屋さんをやっている雰囲気でした。

さて、肝心のレコードの在庫具合ですが、結論を先に言いますと、ややガツガツな内容。インターネットの功罪といいましょうか、アオイレコードの存在が既に好事家の間で有名になっており、国内外からディガーたちによって掘られ尽くされている感があるのです。オーナーのお爺さんいわく、「最近是中国人のバイヤーが洋盤をがっさり買っていき」とのこと。どおりで、在庫の大半が和物で占められておりました。まあ、和物好きな人には悪くない店だと思います。LPはすべて500円。7インチはすべて200円というリーズナブルな値段設定。10枚以上買うと、LPが1枚300円、7インチが100円になります。都会のレコ屋は良盤を厳選セレクトするので高打率型ですが、アオイレコードは、とにかく量が多い。手を真っ黒けにしなが、わずかな良盤をゲットする低打率型の典型。

交通費と時間のことを考えると、レコードの値段が安くてもお得感はありません。でも、お爺さんが現役をはれるのも僅かだと思つと、今回の巡礼には大きな意義があったと思います。地方の古民家レコ屋という設定に物語性を感じる人は近いうちに巡礼されることをオススメいたします。

アオイレコード
<http://mitamura-prin.p1.bindsite.jp/aoirecord/index.html>

